

うつわ



秋 山 達 子

庭の一隅にむしろを敷いて、小さな子どもたちが五、六人で楽しそうに遊んでいる。木の間がぐれに日光がきらきらときらめいて、青葉がこどもたちの顔をさわやかに染めている。

「はい、おみそ汁ができました」

「お野菜もきさんのよ。あら、早く入れものを作ってくれなきゃだめじゃないの。ごちそうがさめちゃうわよ」

「まってよ。だっておわんがうまくできないんだもの。お水がこぼれちゃうから」

「ばかねえ、もったつていいのよ。飲んじやったことにすればいいじゃない」

「かして、かして、私が作ったげるから」

木の葉のお皿に花びらのお肉や野菜を入れて、次はなんとか水を入れるうつわを作ろうと彼女たちは奮闘している。男の子たちは、お父さんやお兄さんたちの役割で、ごちそうにあずからうとまわりでみていたが、おわんがなかなかできないので、

退屈して戦争ごっこに散ってしまった。おままごと、それは誰でも覚えのある小さかった頃の思い出の一こまである。

うつわは、おそらく人類の最初の大きな関心事であったことであろう。はじめは恐らく子どもたちのように木の葉のお皿や木の実の殻で作ったおわんが使われたであろうし、今でも大きな木の葉をお皿がわりにし、水も洩らないほど、ぎっしりとあんだ籠を作って飲みものを入れて使っている人たちもいる。しかし、木や草で作ったものは長もちしないので、我々が古代の人の生活を垣間みることができるのは、遺跡から出土する石の矢じりや土器のかけらのおかげである。

フロイドが性的な連想から、槍や矢を男性の象徴とし、花びんや深皿を女性の象徴として考えたということはよく知られている。しかし、そこには外見的な類似からくる連想よりも、もっと深い意味があるように思われる。獲物をとったり、外敵を防いだりするために、武器を考えだした男性群、そして力強い

男性たちに守られて、毎日の生活を維持するために、火を絶やさないうちに、うつわをかかえて、かまどのまわりに集まっていた女性たち。武器と同様に、うつわは最初の時代から人間の生活にとって、なくてはならない大切なものであった。武器の発明とうつわの製作が、人類の文化の最初の芽ばえであったということもできよう。

土器、陶器、磁器、そしてガラス器などの、うつわの歴史は古い。エジプトでは紀元前五千年位から土器があったといわれるし、中国では殷・周の時代から、うわぐすりをかけた陶磁器があったという。これらのうつわの美しさは芸術品として観賞されていることが多いが、その形や図柄からは、また古代の人たちの考えが偲ばれる。

メソポタミアから出土したテラコッタの壺の破片には、魚や鳥やけだものたちを従えた古代の恐ろしい大女神像が描かれているし、前七世紀頃のギリシャやエトルリアの赤絵や黒絵の壺には、ギリシャ神話にでてくる優雅な女神や勇ましい英雄たち、またユーモラスなサテュロスの踊る姿が描かれていて、その頃は、神話が日常の生活の中でもよく親しまれていたことを思わせる。うつわは、毎日の生活の中から生まれてきたもので

あり、古いうつわをみると、そこからは長い人類の歴史を通して織りなしてきた、人間の喜怒哀楽がそのまま私たちの心にも伝わってくるような気がする。

形を作ること、それは人類の文化の発展であると共に、子どもの生活の中で、意識が生まれ、小さな自我が成長して行くあかしである。

「あ、あつ、へびができちゃった。ぐるぐるっとぐるを巻いているのよ」

「あら、つぶれちゃった。とんとんとたたきましょ。今度はお皿になった」

子どもたちの粘土による縄文土器のうつわ作りの一過程である。形を作ること、そしてうつわを作ることの楽しさ、それは育ち行く子どもの喜びともいえよう。

聖杯を求めて多くの騎士たちが冒険したように、子どもたちの心は聖なるうつわを求めながら成長する。火と水で鍛えられる青銅器や鉄器、そして土を水でこねて形を作り、それを火にかけて作る土器の製造過程は、人間の創作力と自然の力との融合であって、そこには人類の生成の秘密が、みえがくれているように思われる。

(大正大学)